

二〇二五年度

共愛学園前橋国際大学

一般選抜A

国語試験

(一一:〇〇～一一:〇〇)

〔注意事項〕

- 一、試験時間中に机の上に置ける物は、受験票、筆記用具、消しゴム、時計（時計機能のもの）のみです。これ以外のものは試験時間中に使用することはできません。
- 二、試験終了時には、解答用紙のみ提出し、その他は持ち帰ってください。
- 三、解答用紙には、受験番号・氏名を忘れずに記入してください。
- 四、不正行為があったときは、直ちに退室を命じ受験資格を取り消します。それ以後の受験はできません。すでに受験したすべての科目も無効とします。
- 五、試験中、質問がある場合や、気分が悪くなった場合には、手をあげて試験監督者から指示を受けてください。
- 六、試験監督者の指示があるまで、退席しないでください。

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ソクラテスは自身の哲学的活動を神から与えられた使命だとする。アテナイの人々は財産や名声に価値があると考え、そのことばかり気にかけている。神はソクラテスをアテナイに遣わすことでそのようなアテナイの人々に自身の無知を自覚させ、真に価値あるものを探求するよう促している。このようにソクラテスは神託を受け止めるのである。

ソクラテスはこのように使命感を持って哲学的対話を行っていた。しかし、その活動はソクラテスに^ア論駁された人たちの反感を買い、ソクラテスは若者を墮落させ、国家の神々を^イ崇めないという罪により裁判にかけられてしまう（アテナイの政治的対立が背景にあったという説もある）。

当時のアテナイの裁判は陪審制で、ソクラテスの裁判においてはくじで選ばれた五〇〇人の陪審員の投票で判決が下された。告発側、弁護側の双方が演説をした後で投票を行い、一日で有罪／無罪および刑罰を決定してしまうという形式であった。

多くの陪審員を相手にたった一日で弁明しなければならぬので、アテナイの裁判においては告発された人々は陪審員の同情を買い、懇願の言葉を述べたり、小さな子どもを登場させたりして無罪を勝ち取ろうとした。ところが、ソクラテスはそのような手段をとらない。ソクラテスは、裁判においても哲学的吟味の精神を貫き、告発文を論駁しそれが根拠を欠く不当なものだということを明らかにしていく。

A

死刑判決ののち、ソクラテスは獄中で刑の執行を待つ身となる。そのソクラテスに対し、古くからの友人であるクリトンという人物が脱獄の手配を整えたから逃げるようにと促すが、ソクラテスはこのクリトンの誘いを断り、自身が不当だと考える判決に従い、死刑となる。七〇歳であった。

プラトンはこのソクラテス裁判やその刑死に至るエピソードを、ソクラテスが主人公として現れ対話を交わす「対話篇」の形で描いている。『ソクラテスの弁明』は裁判でのソクラテスの演説を描いたものであり、『クリトン』は脱獄をめぐるクリトンとのやり取りをその舞台としている。

このプラトンの著作に描かれたソクラテスがどの程度、現実存在したソクラテスを反映しているのかという点については様々な見解があるのだが、ここでは特定の見解を採ることはせず、ただ「プラトンの著作に現れている限りでのソクラテス」を「ソクラテス」として言及することにする。したがって、この「ソクラテス」が現実の古代ギリシアを生きたソクラテスとどの程度一致しているのかという点には踏み込まない。以下ではとりわけ『クリトン』を読み解くことで、そこに現れている^B道徳的思考がどのようなものかを考えていこう。

『クリトン』を読むにあたっては、講談社学術文庫版の田中享英^{たなかたかひさ}訳を用いることとする。比較的新しい訳であり読みやすく、また文庫なので手に入れやすい。プラトンの著作への言及は^ウカンレイに従ってステファヌス版プラトン全集のページ数と行数を記している。「48b」というような形式の番号で、これは講談社学術文庫版を含むほとんどの翻訳に記載されており、簡単に言及箇所を見つけられるはずである。

まずは『クリトン』の大枠を確認しておこう。この対話篇はソクラテスの古くからの友人クリトンが、獄中のソクラテスを訪ねてくるところから始まる。通常、アテナイの刑罰は判決の出た日にただちに執行されるのだが、ソクラテスの裁判はデロス島の祭礼中に行われ、この祭礼の期間中は死刑が執行されないことになっていたため、ソクラテスは獄中で刑の執行を待つ身だったのである。

クリトンが訪れるとソクラテスは気持ちよさそうに穏やかに眠っている。クリトンはその様子に驚きながらも、デロス島の祭礼に送られた使いの船が間もなくアテナイへと戻ってくる——したがって、ソクラテスの刑が間もなく執行される——という知らせを伝える（『クリトン』43b—43d）。そして、クリトンは脱獄の手配を整えたから逃げるようにとソクラテスに言う。

これに対するソクラテスの反応は、何が正しいかを吟味してみよう、というものである。この人生のセトギワ^エにおいてもソクラテスは哲学的吟味^エの精神に従って生きることを止めない。脱獄すべきか獄中にとどまり刑に服すべきか。ソクラテスは哲学的吟味の結論に

従って決断を下そうとするのである。

そしてクリトンとの対話を通して得られるソクラテスの結論は、脱獄は正しくない、というものである。ソクラテスはたとえ不当な裁判の末の死刑判決だとしても、それに従うべきだと考え、クリトンの誘いを拒否し刑に服するのである。

以上が『クリトン』の大枠である。そこにおいてソクラテスもまた、「なぜ法律に従うべきなのか」という問いに直面している。脱獄は法律違反であり、法律に従うならばソクラテスは死刑に服さなければならない。しかし、その死刑が不当な裁判の結果だとしても法律に従うべきなのだろうか。これがソクラテスの直面している問いである。

そしてこの問いにソクラテスは「法律に従うべきだ」と答える。以下ではこの答えに至るソクラテスの議論を吟味し、その道徳的思考を描写していくこととする。

『クリトン』の冒頭、クリトンは目を覚ましたソクラテスに対して様々な考慮を引いて脱獄を促す。その一つは世間の評判である。お金を出せばソクラテスを救い出すことができたのに、クリトンはそうしなかったと世間に思われるかもしれない。友達よりもお金を大事に思う人間だと思われるのは恥だからクリトン自身の評判のことも考えて逃げてくれ。このようにクリトンは言う（『クリトン』 44 b - 44 c）。

この箇所のクリトンはなんだか自分勝手なことを言っているかと思えるかもしれないが、むしろこれはこのような言い方で説得すること、ソクラテスの負担にならないようにしようという優しさであろう。脱獄をすること^Cで自分に迷惑はかからない、むしろ助かるのだ、と言うことでクリトンはソクラテスに脱獄を促しているのである（『クリトン』 44 e - 45 b 参照）。

クリトンはまた獄中にとどまるというソクラテスの行為は正しくない、とも主張する（『クリトン』 45 c - 46 a）。ソクラテスは助かるうと思えば助かることもできるのにそれをしない点で自分を見捨てている^D。また、自分や家族を助けることができず敵に打ち負かされ^Eたままその負けを受け入れるのは恥であり、正しいことではない。このようにクリトンは論じる。

このようなクリトンの主張に対して、ソクラテスは何をすべきかを吟味してみようと述べる（『クリトン』 46 b）^F。ソクラテスはまず、考慮すべきは脱獄が正しいことかどうかであり世間にどう思われるかではない、ということ^Gをクリトンに納得させる。ソクラテスは「いち

ばん大事にしなければならないのは生きることではなくて、よく生きることだ」(『クリトン』48b)と言う。

これは「単に生きるのではなく、よく生きる」とキャッチフレーズの的にまとめられることもある有名な箇所だが、ここでの「よく生きる」は道徳的な意味での「善き生」をただちに意味するわけではない。それは「充実した生」あるいは「幸福な生」をまずは意味する。ただ、ソクラテスにおいてはこれは「魂に配慮して生きること」、つまり「人格を損なわない仕方です立派に生きること」であり、結局は「正しく生きることだ」ということになる(『クリトン』47e-48b)。

充実した人生を生きるとは、魂に配慮して生きることであり、正しく生きることだ。したがって、脱獄すべきかどうかの判断も、それが正しいことなのかどうかの判断に基づいて決定しなければならない。言い換えると、ソクラテスは道徳的観点から熟慮したうえで脱獄の是非を判断すべきだとするのである。そして、ソクラテスはこの点をクリトンに納得させると、何が正しいことなのかについての哲学的吟味を開始する。

ソクラテスは吟味の出発点として二つの道徳原理を提示する。第一のものは「たとえ誰かに害を与えられたとしても人に害悪を加えてはならない」というものである(『クリトン』49c)。そして、第二のものは「正しい同意には従わねばならない」というものである(『クリトン』49e)。これらの原理をそれぞれ「加害原理」、「同意原理」と呼ぶことにしよう。

第二の同意原理は、要するに同意したこと、つまり約束は守らなければならないということであり、その限りではそれほど異論はないだろう。

H、後の議論のために少し確認しておく、我々は日常的には「同意」や「約束」を例外を認めないほど厳格なものとして理解しているわけではない。例えば、私が研究者仲間の友人とランチの約束をしていたとしよう。特に用事があるわけではないのだが、久しぶりに会ってちよつと業界の情報交換でもしようか、というわけである。ところが、その約束の当日に私の親が危篤だという連絡が入る(親不孝な例ですいません)。このときにも私は約束をキャンセルせず友人とランチをすべきだ、とは誰も考えないだろう。確かに私はその日にランチをすることに「同意」していたが、日常的な意味での「同意」はいっさいのキャンセルを許容しないほど厳格なジュンシユ^オを求めるものではないのである。

第一の加害原理のほうはどうだろうか。こちらには異論があるかもしれない。他人に害を加えられたら仕返しに害を加えてもよいのではないだろうか。

I
ソクラテスも加害原理が自明に正しいとは言えないという点には気づいていて、この原理を出発点に議論を進めてもよいかをクリトンに確認している（『クリトン』49 d－49 e）。そこでクリトンがその原理を受け入れていると述べるので、加害原理も前提として議論が進められることになる。

続けてソクラテスは次のように述べる。

それでは、これらのことにもとづいて考えてみてくれたまえ。もしもぼくたちが、国家を説得できないまま、ここを立ち去るとしたら、ぼくたちはだれかに対して——しかも、いちばんそうしてはならない者たちに対して——害悪を加えることになるのではないか。それとも、そうはならないだろうか。また、ぼくたちが正義^{ただ}しいと同意した約束を守ることになるだろうか、ならないだろうか。（『クリトン』49 e－50 a）

この箇所で明らかにソクラテスは脱獄が加害原理と同意原理への違反になるのではないかとクリトンに問いかけている。これに対するクリトンの答えは次のようなものである。

50 a
そう訊かれても、ソクラテス、ぼくには答えられないよ。君が何のことを言っているのか、よく分からないのだ。（『クリトン』

クリトンはソクラテスの問いかけに対して困惑を示す。クリトンには脱獄が誰かに——それも「いちばんそうしてはならない者たち」に——害を加えることであり、同意を破ることだと言われても何のことか理解できない。これはおそらく『クリトン』の読者にとって

も同様で、ここまで読み進めてきた読者はクリトンと一緒に「何のことを言っているのか、よく分からない」と感じるだろう。

クリトンの困惑に対してソクラテスは J 化された「国法」を登場させる。

ソクラテス それでは、こう考えてみてくれたまえ。今かりに、ぼくたちがここから脱走するにせよ、あるいは他のどんな名前ですれを呼ぶにせよ、そのことをしようとしているところへ、国法が国家とともにやってきて、ぼくたちの前に立ち、こう言ったとしたらどうだろう。「ソクラテスよ、言ってくれ。いったいお前は何をしようと企んでいるのか。お前は、お前がしようとしている仕業によって、私たち法と、さらに国家の全体を、お前の勝手で滅ぼそうと考えているのではないのか。それとも、お前は、国家の中でいったん正義として下された判決が少しも力をもたず、個人によって無効にされ破棄されるようになって、なおその国家が存続し、崩壊しないでいられると思うのか」と。ぼくたちは、クリトン、この問いに対してどう答えたらよいだろうか。（『クリトン』50 a – 50 b）

ここで国法はその判決に従わないことは国法、ひいては国家を滅ぼそうとすることであり、一種の加害だと論じる。

これに対してクリトンは、ソクラテスに対する判決は不当な判決であり、脱獄はそれが国家や国法^Kを破壊する行為だとしても、「加害」だとは言えない、と応答する（『クリトン』50 b – 50 c）。^Lそして、そのクリトンの応答に対して国法は二つの論証を提示し、ソクラテスの脱獄は不正なのだと論じる。第一の論証は「尊敬論証」、第二の論証は「同意論証」と呼ばれ、国法の議論の主要部分を構成している。以降ではこの二つの論証を検討していくこととしよう。

（『道徳的に考えるとはどういうことか』大谷 弘）

問1 文章中の A には次の①～⑤の五つの文のうち四つを正しく並べ替えてできる文章が当てはまる。正しく並べ替えたときに

不要なものはどれか。次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 1。

- ① 有罪に投票した陪審員たちは、自分たちの義務に反し真実を見極めようとしなかった。
- ② このことは無知なアテナイの市民の現状から予測されていた。
- ③ しかし、その結果は有罪であり、ソクラテスには死刑の判決が下る。
- ④ このようにソクラテスは考え、彼らを「陪審員」と呼ぶのを拒否している。
- ⑤ それはソクラテスの考えでは不当な判決である。

問2 傍線部B「道徳的思考」とはどういうことか。文章中で使われている「道徳的」という言葉の用法から判断して最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 2。

- ① 共同生活の約束事となっている成文化されていない合意事項をふまえて行動するということ。
- ② 何が正しいことなのかを十分に吟味することによって生き方の指針を決めるということ。
- ③ 物事を判断するときに正しい行いをしようとする内面の原理に基づこうとするということ。
- ④ 法律を成立させる前提となっている社会的習慣を考慮して判断しようとするということ。
- ⑤ 正しい行いをしようとするときに従わなければならない諸規範を尊重するということ。

問3 傍線部C、D、Eの「自分」はそれぞれ誰のことか。正しい組合せとなっているものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 3。

- | | | | | | | |
|---|---|-------|---|-------|---|-------|
| ① | C | ソクラテス | D | ソクラテス | E | ソクラテス |
| ② | C | ソクラテス | D | ソクラテス | E | クリトン |
| ③ | C | ソクラテス | D | クリトン | E | クリトン |
| ④ | C | クリトン | D | クリトン | E | クリトン |
| ⑤ | C | クリトン | D | クリトン | E | ソクラテス |
| ⑥ | C | クリトン | D | ソクラテス | E | ソクラテス |

問4 傍線部F「ソクラテスはまず、考慮すべきは脱獄が正しいかどうかであり世間にどう思われるかではない、ということをクリックに納得させる」とあるが、ソクラテスのどのような性格がうかがえるか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 4。

- ① 議論の本質を見極めようとするため本筋から外れた発言をした場合にはその誤りを厳しく指摘せずにはいられない性格。
- ② 議論の焦点を確認し相手の思い違いを訂正することによって対話の主導権を握ろうとする性格。
- ③ 友人が自分のことを思ってくれた発言であっても自分の主張と異なるところがあれば相手の善意による発言とは認めようとしていない性格。
- ④ 物事について吟味する過程で疑義が発生した場合は相手に丁寧に問いただし相手との合意を形成しようとする性格。
- ⑤ 相手の理解力に応じて考え方の筋道をかめつつ段階を経て教えていこうとする性格。

問5 傍線部G「いちばん大事にしなければならないのは生きることではなくて、よく生きることだ」とはどういうことか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は[5]。

- ① 日々の生活を漫然と行うのではなく充実感を味わいながら生活することが大切だということ。
- ② 人格を尊重して生きることが大切なことからそれを傷つけるようなことはしてはならないということ。
- ③ 人間として正しく生きることが生活を維持することよりも優先させなければならないということ。
- ④ 道徳的な意味での善き生を達成できるように毎日の生活を積み重ねる必要があるということ。
- ⑤ 魂に配慮して生きることを日々の生活の中で意識していかなければならないということ。

問6 文章中の[H]に当てはまる最も適当な語を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は[6]。

- ① ただし
- ② しかし
- ③ ところで
- ④ まず
- ⑤ そこで

問7 傍線部I「ソクラテスも加害原理が自明に正しいとは言えないという点には気づいていて、この原理を出発点に議論を進めてもよいかをクリトンに確認している」とあるが、どういうことを言いたいのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は[7]。

- ① 加害原理は必ずしも正しいとは言えない原理であるとソクラテスは考えていたので、クリトンがこの原理についてどう考えているかを確認したということ。
- ② 場合によっては説明が必要となる原理に基づいて議論を進めるために、ソクラテスはクリトンには説明が必要かどうかを確かめようとしているということ。
- ③ 加害原理には場合によって正しいとは言えないことがあるので、ここでこの原理を用いることができるかどうかについて合意を形成しようとしているということ。

④ ソクラテスは誤っていないことが明らかである原理を用いるにあたって、クリトンにこの原理に基づいて議論を進めることへの同意を求めているということ。

⑤ ソクラテスは加害原理が説明不要な明らかな原理ではないことに気づいていたため、クリトンに正しさを承認してもらうことで不安を解消しようとしているということ。

問 8 文章中の J に当てはまる漢字二字の語を、文脈から考えて答えよ。解答番号は 8。

問 9 傍線部 K 「国法」とはどのようなものか。説明となる十一字の表現を文章中から抜き出せ。解答番号は 9。

問 10 傍線部 L 「そして、そのクリトンの応答に対して国法は二つの論証を提示し、ソクラテスの脱獄は不正なのだと論じる」という一文の解釈について生徒たちが意見を交換し合った。生徒 A く生徒 E の発言で最も文意をふまえた発言となっているものを、次の①く⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

① 生徒 A … 「国法は…提示し」という表現はおかしいです。「国法は」という記述は誤りで「ソクラテスは」とするのが正しいと思います。

② 生徒 B … 少し待ってください。それでは「ソクラテスの脱獄は不正なのだ」と論じるのがソクラテスになってしまいます。不自然です。

③ 生徒 C … 私も B さんと同じ意見です。したがって「国法は」は「国法については」と「について」を補って読むのが正しいと考えます。

④ 生徒 D … 難しいですね。けれども、この文の「二つの論証」はクリトンの応答に対するソクラテスの反論として読むのがよいと思います。

⑤ 生徒E：そうですね。そして先の加害原理と同意原理に対応させて尊敬論証と同意論証を提示していると言えます。

問11 波線部ア～オについて、カタカナは漢字で書け。漢字は読みを書け。解答番号は ア¹¹、イ¹²、ウ¹³、エ¹⁴、オ¹⁵。

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

しばらく静まっていた蝸ひづりがまた一斉に鳴き始めた。武元たけちかは務めの最中で汗を拭うわけにもいかず、中奥御座之間の御次でじつと目を閉じていた。秋には吉宗が退隠するといわれており、今日はまず近親の者に家重の將軍襲職を披露することになっていた。

下段之間には家重いえしげと宗武むねたけ、さらに家治いえはると生母のお幸の方、そして家重の後ろには影のように忠光ただみつが座していた。御次は上段からは左手にあたり、武元たち幕閣は真横から家重たちを眺めていた。

吉宗はまだ着座していなかった。宗武は端正な顔をまっすぐに正面に上げて、どこを見るでもなくまばたきを繰り返している。

その手前で家重は右足を斜めに投げ出して、震える右の拳を隠すように左手で押さえていた。

座っているだけでも苦しい顔つきに、襷袢を付けてきたのだろう膨らんだ袴。その後ろの忠光の動じない横顔が、家重の精巧な切り絵のようにも思えた。

宗武の向こう側には家治が座り、お幸の方と宗武の妻はその後列にいた。

宗武の正室は京の摂家のうら若い美しい姫で、夫婦仲は睦まじかったが、まだ子がなかった。着座した家治が笑いかけると、心底嬉しそうな優しい笑みを返していた。

お幸の方は張り詰めた顔で、ずっと誰とも目を合わせぬようにうつむいていた。一度家治が案じて振り向いたが、お幸の方はそれにも気づかなかった。

御庭の蝸がぴたりと鳴き止み、武元たちは揃って手をついた。

吉宗が上段に腰を下ろした。

「明月、余は將軍を辞すと決めた。大御所となり西之丸に移る」

皆がいつせいに平伏した。

西之丸は元来、世子が隠居した將軍が住む場所だ。吉宗がそこに入れば、当然、家重が本丸に移ることになる。

次の將軍は家重だ。

広間は静まり返っていた。だがすぐに波のように蜩の鳴き声が戻ってきた。

「家重の將軍宣下は年内、十一月じゃ」

^A幕閣たちがどよめいた。それぞれの思惑が声ともならず、呻きのように予期せず漏れたようだった。

「九代は家重である。皆、異論はなからうな」

吉宗が正面と幕閣たちのいる左手を、隈なく睨みつけた。

武元の前列に座していた乗^{のり}邑^{さと}が下段のほうへ身を乗り出した。

目敏く気づいた吉宗はゆつくりとそちらへうなずき、まずは家治をまっすぐに見た。

「母上がたは先に退出じゃ。そなたも行くか」

家治は微笑んで首を振る。女たちはあわてて立ち上がり、広間を出て行った。

なぜか武元は、そのとき乗邑が薄笑いを浮かべたような気がした。

「乗邑、なにごとか」

吉宗は威厳で黙らせようとしていた。

だが乗邑は表面、平然と吉宗を見返した。

「上様が大御所様となられます前にお伺い致しとう存じます。上様はもしや、このち側用人制を復されるおつもりでございますか」

「いいや。側用人など二度と置かせぬ。諸事、大権現様の思し召し通り」

「ならば我ら老中の前に座しておる、この者は何でございましょうか。まさに將軍との間に立ち塞がる側用人が、上様の御目には入りませぬか」

乗邑の鼻先に、家重の背後に控えている忠光の肩衣があった。

「すまなかった」

忠光が静かに家重の言葉を伝え、家重は座したまま後ろへ下がった。それにつれて忠光もさらに後ろへ動いた。寸の間、乗邑の顔に侮蔑が浮かんだ。

乗邑は己に厳しく、中風の気で手足の震えと痛みがあるが他人には見せない。だから家重を見る目にも容赦がなく、家重の下への労りを I と感じ、優しさが II に、辛抱強さが III に映った。

「得心がいったか、乗邑」

さすがに吉宗がむっとして尋ねた。

だが乗邑ははじめから腹を括っているらしかった。

「今、それがしに詫びたのは忠光でございましょうな」

^B 吉宗は眉をしかめた。

「家重は余に詫びたのじゃ。余とそなたの間を塞いでおったゆえな」

武元は肩をすくめた。吉宗には家重を助けよと命じられたが、こんな知恵比べには手も足も出ない。

「早晚、老中どもは直に上様とお話することも叶わぬようになりましょう。九代將軍は宗武様となさるべきでございます」

「乗邑！」

吉宗が声を荒らげた。

外の蟬までいつせいに鳴き止んだ。だが武元は、ここまで言う乗邑の IV にむしろ感動していた。

「上様が大御所様となられる今ならば、家重様は廃嫡にはあたりませぬ。どうか宗武様を九代となさってくださいませ。宗武様が今ここで、十代は家治様に直すと我ら老中に約してくださいされば、諸事大権現様お定めの通りでございましょう」

^C 宗武は平然と宙を眺めている。いきなりこれほどの話が始まって顔色一つ変えぬというのが、あらかじめ企んでいた証のようでもあった。

^D 「家重の何が不足じゃ」

家重は身体がわななき、こめかみを玉の汗が滑り落ちている。

「あいだに忠光を挟むとなれば、家重様のお言葉かどうか分かりませぬ。それが不足にございます」

「そのほうも忠光のことは、よう知っておるであろう。忠光は勝手に言葉を作ったりはせぬ」

「それがしはこの者を信じておりませぬ。上様こそご存知あられぬ。此奴はたしかに他所からの賄は受けず、誰からも指図はされぬのでございましょう。ですが己の考えは持っておりますぞ」

「何が言いたいのじゃ」

「大岡忠光は、自らの言いなりになる者を家重様の奥へ上げております」

乗邑は怯まずに吉宗を見つめていた。

武元はぼんやりと忠光に目をやった。

己の息のかかった者を大奥に送り込むなどという大がかりなことは、よほどの縁戚や金子がなければできぬのではないか。この世には桁違いの財を持つ者が大勢いるが、それらとケツタクして企みをするとなれば、武元のような奏者番ごときでは到底不可能だ。

だがしかし。忠光ならば直に家重に囁くことができるのだからして――

ふむ、と腕組みをしたとき、脇息を苛立たしげに叩く音が聞こえた。はっとしてそちらを向くと、吉宗が目を吊り上げて武元を睨んでいた。

武元は声こそ上げなかったが、ぎゃつと肩をすくめた。だがこのようにときに武元の出る幕はない。

「乗邑が勘繰っておるのは御内証のことであろう。ならばそのほうの思い違いじゃ。あの者は忠光とは何の関わりもない。むろん、忠光の妻ともじゃ。御内証がたとえどれほど栄耀栄華でも、忠光には損も得もない」

なるほど、奥というなら忠光の妻ということもあるのである。武元はいよいよ肩をすくめるしかない。

家重は困惑からか、さかんにまばたきをしている。

気の毒な主従だと武元は思った。家重は己の側室のことまで忠光が足を掬われかねぬのに驚いたろうが、忠光にとってはきつと今

に始まったことではない。

なおも乗邑は食い下がっていた。

「上様。それがしが申しておるのは、お幸の方様の御事にございます」

「お幸じゃと」

家重と忠光が、弾かれたように頭を上げた。乗邑は目の端でそれを見ている。

「左様にございます。それがしはお幸の方様に伺いましてございます。忠光が仲立ちとなつて家重様に御目をかけていただいた、しかし忠光の言うことを全く聞かぬゆえ、いつの間にやら家重様から遠ざけられたそうでございます。まこと、女子などを用いますとは」

乗邑は誰の顔も見ず、冷たく吐き捨てた。

「乗邑よ……」

吉宗はため息ともつかぬ、気の抜けたような呻きを上げる。

「上様に偽りなど申しましょうか。お幸の方様も忠光も、むろんハットに触れるわけではない。お幸の方様の御事は、この上もない吉と出た。ですが、これは小さなことでございますか」

通詞にすぎないはずの忠光が、家重の奥向きの差配をした。

「一度味をしめた軽輩者が、次はどんな大それたことを致すのか。老中首座としてそれがしがここで止めねば、後世^ウ謗りをお受けになるのは上様でございます」

さしもの吉宗が口を噤んでしまった。ここまですなれば、これはもう乗邑の命がけのカン^エゲンである。

だが、そうまでされる家重の心はどうなるのか。

忠光はただ震えている。この御側がこれほど顔色を変えるのを武元は見たことがない。

もう十分ではないか。どうなるかも分からぬ先のことを取り沙汰して、皆で家重を苦しめているだけではないか。側用人だのと尤もらしいことを言つて、ただ家重と忠光を貶めているだけではないのか。

乗邑は上段ににじり寄った。

「家重様が將軍となられますならば、忠光は遠ざけてくださいませ。これは上様でなければお命じになることはできません。大御所様となられますならば、その前に、今それだけはご決断くださいませ」

「それが、家重が將軍になる条件と申すか」

「いかにも左様にございます」

乗邑は言い切って頭を下げた。

広間では誰も、息をするのさえ憚られた。蟬の声などとうに耳には入らず、武元はむろん口を挟めない。幕閣の誰かが堪えきれずに細い咳をすると、立て続けにあちこちで皆が咽せた。

「誰か。何ぞ申すことはないのか」

吉宗は座を見回したが、口を開く者などない。

「家重。そのほう、何か申さぬか」

さすがに家重には怯んだ様子もなく、広間の隅にまで届く声で何かを言った。

足りぬのはただ、それがどうにも解せぬということだけだ。

びくん、忠光が身を震わせた。

「忠光、なんと申しておる」

だが忠光は額を畳に擦りつけて口を開かない。

――

もう一度、家重がまた大声を張り上げた。

「伝えよ、忠光。余の命じゃ」

ついに忠光は顔を上げた。つねに家重の心まで伝えてくる忠光が、まるで気配の異なる声だった。

「忠光を遠ざける、くらいなら、私は將軍を……」

「忠光！ 続きを申さぬか」

乗邑が身を乗り出して叫んだ。だが忠光は突つ伏したまま激しく頭を振っている。

もしもこの場で家重自らが將軍襲職を止めるなどと言い出せば、これはもう、そうなってしまう。

してやっつたりの顔をする

V

に、青ざめた吉宗、そして誰より忠義面をした

VI

。その中でただ家重だけが毅然として^Eいる。

「忠光が言わぬならば、私が言おう」

吉宗が驚いて首を伸ばした。乗邑も、当の家重も忠光も思わず振り向いていた。

家治が穏やかな笑みを湛え、口を開いた。

「御祖父様。私は子ゆえ、少しは父上の言葉が分かります。代わりに申しても宜しゅうございますか」

「そなた……」

吉宗は呆けたようにぽかんと見返している。

「忠光を遠ざけよう、権臣にするくらいなら。私は將軍ゆえ、と。御祖父様、父上はそう仰せになりました」

権臣にするくらいなら、將軍たる私は忠光を遠ざけよう――

「なんと、家治……」

「乗邑。忠光の言葉は疑つても、私の言葉は疑わぬだろう？」

家治は形の良い目を大きく見開いて、乗邑の顔を覗き込んだ。

乗邑が口を開かぬとみると、家治はその笑顔のまま吉宗のほうへ向き直った。

「これは、私が権臣などを作るかどうか見ておれ、と啖呵を切られたということでございますよね。だとすると忠光は、御祖父様にお伝えするにはあまりに不遜ゆえ申し上げなかった、ということでしょうか」

吉宗はぽつかりと口を開いた。

家治は人形のように整った顔をにつこりさせて、小首をかしげてみせた。

「私の役目は父上をお助けすることだと母上には言われてまいりました。ですが、どうもまだ老中たちの話は難しくてよく分かりませぬ」

皆が家治に見惚れていた。

これで決まりだ。

「余は今日ほど嬉しいことはない」

吉宗は立ち上がった。

「家重といい家治といい、大したものじゃ。余は、子にも孫にも恵まれた。これで安心して退隠できる」

最後に吉宗は乗邑を見下ろした。

「そのほうが“待った”を入れたゆえ、まことの家重と家治を知ることができた。乗邑、礼を申すぞ」

広間を出て行くとき、吉宗はそつと目尻を拭っていた。

延享二年（一七四五）九月、吉宗は大御所となり、本丸を去って西之丸に移った。三十三歳で將軍に就いてから、およそ三十年の歳月が流れていた。

その明くる月、乗邑は老中をヒメオンされた。在任中に一万石の加増を得ていたが、これを削がれ、西之丸下の屋敷も没収された。そうしてついに家重は將軍を宣下した。元服から二十年、明ければ三十六歳になる十一月のことだった。

（『まいまいつぶろ』村木嵐）

註 家重いえしげ…徳川家重いえしげ 身体に障害があり、尿が漏れてしまうこともある。特に言語の障害がはなはだしく、家重の言葉を聞き取ることができるのは、大岡忠光一人だけであった。

宗武^{むねたけ}…徳川宗武^{むねたけ} 家重の弟

忠光^{ただみつ}…大岡忠光^{ただみつ} 徳川家重の言葉を聞き取り、周囲の者に伝える「口」の役割に徹し、自分が見聞きしたことを家重に伝えるよう

な「耳」「目」の役割をすることは、自らに厳しく禁じている。

武元^{たけちか}…松平武元^{たけちか} 奏番者。吉宗から家重の補佐を依頼されている。

乗邑^{のりさと}…松平乗邑^{のりさと} 老中首座

問1 傍線部A「幕閣たちがどよめいた」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は□1。

- ① 家重の將軍宣下を待ちわびていた幕閣たちが、ようやく世継ぎ争いに決着がついたと言葉にできない安堵の声を漏らしている。
- ② 家重の將軍宣下などありえないと考えていた幕閣たちが、期待を裏切る吉宗の言葉に落胆と怒りを含んだ呻き声を漏らしている。

- ③ 次の將軍職に就くのは宗武に決まっていると誰もが考えていたところ、次の將軍は家重だと告げられ、思いもしない出来事に声にならない不満の思いが漏れ出ている。

- ④ 次の將軍には誰が相応しいか幕閣が様々な思いを抱いていたが、吉宗から正式な決定が告げられたことにより、安堵や不満などそれぞれの思いが言葉にならない声として漏れ出ている。

- ⑤ 吉宗が自分の子を臍負するような決断を下したことに對し、家重を將軍に押す者宗武を將軍に押す者双方からの不満の声が漏れている。

問2

I	II	III
---	----	-----

に入る言葉の組み合わせとして、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は□2。

- | | | | | | | |
|---|---|-----------------------|----|------------------------|-----|-------------------------|
| ① | I | 追従 <small>ついで</small> | II | 虚弱 | III | 粘り強さ |
| ② | I | 慰撫 <small>いぶ</small> | II | 温和 | III | 忍耐強さ |
| ③ | I | 優しさ | II | 慈愛 <small>じあい</small> | III | 強情 <small>てうじやう</small> |
| ④ | I | 慰勞 <small>いろう</small> | II | 貧弱 | III | 頑固 |
| ⑤ | I | 諂 <small>へつ</small> い | II | 懦弱 <small>だじゃく</small> | III | 意固地 |

問3 傍線部B「吉宗は眉をしかめた」について、吉宗が眉をしかめた理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 3。

- ① 老中首座でありながら家重の言葉を聞き取ることができず、平気で忠光が詫びたのかと聞いてくる乗邑の鈍感さにいらだつたので。
- ② 將軍の威光でもって家重の將軍就任を認めさせようとしていたのに、乗邑が怯むことなくしつこく異を唱えてくるので。
- ③ 家重の謝罪の言葉を忠光が伝えていることを知りながら、あくまでも家重本人の口からの言葉を求めようとする乗邑の不遜な態度に怒りを感じたので。

- ④ 將軍が乗邑に対して詫びているような印象を幕閣に与えようとする乗邑の狡猾な態度に対して怒りを覚えたので。
- ⑤ 側用人など置かぬと吉宗は言っていたのに、肝心の家重が側用人を置いていることを認め乗邑に詫びてしまったので。

問4 IVに入る、「自分の信念に忠実で容易に人の意に屈しない強い心」という意味の、「骨」を使った二字の熟語（読みは三字

字の語）を記せ。解答番号は 4。

問5 傍線部C「いきなりこれほどの話が始まって顔色一つ変えぬというのが、あらかじめ企んでいた証のようでもあった」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 5。

- ① 家治を次の將軍に据えるという話が突然出てきたにも関わらず、驚きも悲しみもないということは、あらかじめ乗邑と宗武が計画していたことを証明するかのようだった。

- ② 宗武の次の將軍を家重の家系に戻すなどという話まで出てきたのに、宗武が表情を変えないということは、あらかじめ乗邑と宗武が計画していたことの証のようだった。

- ③ 老中首座が將軍の決定に異議を唱えるというような騒動が起こったにも関わらず、誰一人顔色を変えないというのは、すべてがあらかじめ仕組まれていた証のようだった。

④ 老中首座の乗呂が將軍に逆らう大事件を目の前にしても顔色一つ変えない宗武の姿が、あらかじめ乗呂と武元が示しあわせていたことを証明しているようだった。

⑤ 乗呂が顔色を変えることなく吉宗に逆らっていられるということは、今回の事件はあらかじめ綿密に計画されていたということの証のようだった。

問6 傍線部D「家重の何が不足じゃ」について、乗呂が家重を次期將軍に据えることに反対する理由として最も適当なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

① 心身に障害のある家重は側用人の忠光だけを過度に信用し、幕閣に対して直接自分の考えを伝えようとしなから。

② 重度の障害者である家重は常に襦袢の着用が必要で、とても征夷大將軍として軍を率いることなどできないだろうと考えるから。

③ 家重が將軍職につくことにより、ようやく廃された側用人制が復活してしまい、限られた個人が政を専横してしまう世の中に戻ってしまう危険があるから。

④ 忠光が自分の息のかかった女性を大奥に送り込んで家重を籠絡しようとしているのに、家重はまったく気が付いていないから。

⑤ 忠光がどれほど誠実な人物であろうと、人間である限り老中の言葉を一言の誤りもなく奏上できることなどありえないから。

問7 V VI に入る人物名の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

① V 家治 VI 武元 ② V 乗呂 VI 武元

③ V 宗武 VI 乗呂 ④ V 乗呂 VI 宗武

⑤ V 乗呂 VI 忠光

問8 傍線部E「毅然としている」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は8。

- ① 老中首座に反対されてはいたしかたないと、静かに成り行きを見つめている。
- ② 誰が何を言おうと自分の考えを曲げることはない、動じることなくしっかりしている。
- ③ まるで自分には関わりのないことのように、超然とした態度でいる。
- ④ 理不尽な言いがかりをつけられ、どうすることもできないと呆然としている。
- ⑤ 忠光がどのように説明するのか、心を無にして冷静にみている。

問9 次の会話は、この文章を読んだ生徒の会話である。この会話を読んで後の(1)、(2)の問いに答えよ。

生徒A 小説の視点について話したいんだけど。夏目漱石の「坊ちゃん」は一人称視点の小説でしょう。この話の語り手はどういう視点をしているのかしら。

生徒B 以前授業で習った「ある日の暮れ方のことである。一人の下人が…」で始まる作品があるでしょう。あの作品は三人称視点だったよね。

生徒C この作品の語り手は登場人物を外から客観的に観ているだけだから三人称視点だよ。

生徒D でもⅦの内面には入っていると思うんだ。限られた人物の内面には入るっていう点で下人の話とは違うよ。

生徒E そうだよな。確かにⅦの視点で語っていると思える場面とか、時には地の文でⅦの心情を語っているように感じる場面があるよね。

生徒A なるほど、三人称視点にもいろいろなタイプがあるのね。

- (1) 生徒Bが授業で習ったという作品は、大正時代に活躍した新思潮派の作家の作品である。次の作品群の中から**その作家の作品に該当しないもの**をすべて選び出し、番号で答えよ。ただし、すべてその作家の作品である場合は、解答欄に「非該当なし」と記すこと。 解答番号は **9**。

- | | | | |
|---------|--------|-------|--------|
| ① 黒い雨 | ② 蜘蛛の糸 | ③ 地獄変 | ④ 戯作三昧 |
| ⑤ 奉教人の死 | ⑥ 藪の中 | ⑦ 羅生門 | ⑧ 蟹工船 |

- (2) **VII** に入る人物名を、本文の中から探し出して記せ。 解答番号は **10**。

問10 波線部ア～オについて、漢字は読みを書け。カタカナは漢字で書け。 解答番号は ア **11**、イ **12**、ウ **13**、エ **14**、オ **15**。

